

事例報告

本を読んで話す会：日本赤十字九州国際看護大学図書館における読書推進の取組み

多川 綾子

TAGAWA Ayako (The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing Library), Reading Circle : An Activity of Promoting Reading at the Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing Library. *Nursing and Information* 2011;18:68-70

キーワード：読書会，読書推進，読書離れ，コミュニケーション

Reading circle, Reading promotion, Aliteracy, Communication

I. はじめに

「国民読書年」の2010年，全国で読書に関連するイベントやシンポジウムが開催され，読書を推進する活動が行われた。「活字離れ，読書離れ」と言われ続けて久しいが，それ以前からも，いわゆる「読書会」とよばれる会やグループが全国に多数存在し，それぞれに読書活動を行っている。大学図書館も例外ではなく，例えば，教員が推薦する図書のコーナーを館内に設けたり，学生たちが推薦する図書の紹介文を小冊子形式で作成して配布したり，図書館員と学生ボランティアが協力して，読書に関連する企画を考え，全学を挙げてそれを展開するなど，さまざまな取組みが実施されている。

しかしながら，読書離れの状況は変わっていない。2010年に読売新聞社が実施した全国世論調査^{*1}では，大学生の年齢にあたる20代の46パーセントが，1か月に1冊も本を読まないという結果を示している¹⁾。学内においても，多くの教員から「学生は，テキスト関連の図書は読んでいるようだが，それ以外はほとんど本を読んでいる」との声をよく耳にする。

本稿では，このような学生の読書離れの傾向を鑑み，日本赤十字九州国際看護大学（以下「本学」という。）で2009年10月から開催している読書会「本を読んで話す会」について報告する。

II. 背景

この「本を読んで話す会」は，現図書館長の発案によるもので，その名のとおり皆で同じ本を読んで，それについて語るというスタイルをとっており，従来の堅いイメージがある読書会よりも，もっと気楽な雰囲気です。

んだ本についておしゃべりをし合おうという会である。

開催の背景には，先に述べた読書離れがあるが，図書館長をはじめ，学内の多くの教員が，学生の「語彙力，表現力の乏しさ」や「他者とのコミュニケーションの不足」などを日々感じているところも大きい。そこで，学生にとってこの会が，単に本を読み，その内容を話すだけの場で終わることなく，彼ら自身の考えていることや興味を持っていることなどを他者へ発信する場，また他者の意見を聞く場となることを目的として，開催する運びとなった。

III. 開催までの準備

1. 対象書籍の選定

まず，対象書籍を選定する。テーマを決め，教員へ対象書籍の案を募集するか，司書が選書した書籍案リストから，図書館運営委員による投票方式で選定する。

2009年度開催した第1回から第4回までは，テーマを“生命，いのち，生物”に関連するものとして書籍を選定した。

2010年度は，特にテーマを設定せず，毎年入学式で配布している「学長が新生にすすめる100冊の本」^{*2}リストを参考にして選定したり，学内で開催する行事に関連する書籍を対象に選定したり，学生の関心をひくよう選定している。

2. 開催日時の決定

なるべく多くの学生や教員が参加できるよう，1年生から4年生まで複数の学年が学内にいる日を時間割で確認し，開催日を決定する。

実施時間は，毎回40分から50分程度で，昼休み，また

表1 開催内容

回数	開催日	対象書籍	参加人数
第1回	2009年10月22日	『動的平衡：生命はなぜそこに宿るのか』福岡伸一，木楽舎，2009.	11
第2回	2009年11月26日	『初歩から学ぶ生物学』池田清彦，角川書店，2003.	10
第3回	2010年1月21日	『分類思考の世界：なぜヒトは万物を「種」に分けるのか』三中信宏，講談社，2009.	11
第4回	2010年2月26日	『木を植えよ！』宮脇昭，新潮社，2006.	5
第5回	2010年5月6日	『孫の力：誰もしたことのない観察の記録』島泰三，中央公論社，2010.	10
第6回	2010年7月2日	『大人の時間はなぜ短いのか』一川誠，集英社，2008.	10
第7回	2010年10月22日	『日本とアメリカ逆さの常識』アントラム栢木利美，中央公論新社，1997.	10

は午後の授業が入っていない時間帯に設定する。昼休み
に開催する場合は，昼食持参のランチョン形式で行う。

3. 開催場所の決定

人の流れがわりに多く，学生が昼食を取ったり，友人
同士で談話したりする場所である「交流プラザ」や「学
生ラウンジ」を開催場所に設定している。

理想的には，図書館内のグループ学習室のような仕切
られた空間に場を設け，参加者を集めたいところである
が，適切な場所がないため，毎回学内に場所を探している。

4. 参加者の対象および条件

参加者の対象は，学生だけでなく，教職員を含む学内
者全員である。参加にあたっては，「対象書籍を読んでく
ること」としているが，これも必須条件ではない。開催
当日に「本を読んでいなくても，話だけでも聞きにきま
せんか？」という誘いのメールを学内者全員に送ったり，
会の途中に通らなかった学生に声をかけたりして呼び込
むこともある。

5. 書籍の集団購入

近くに書店がない，購入する閑がないなど書籍を入手
するのが難しい人のために，集団で購入できるよう，書
籍の申し込みを図書館で受けることにしている。先に述
べた参加条件に書籍の購入は含んでいない。

書籍の申し込み方法は，以下のとおりである。

- ①購入希望者は大学ホームページにアクセスして必須
事項を入力する。
- ②①の申込情報は図書館のメールに送信され，購入希
望者は申し込みが完了した旨のメールを図書館から
受ける。
- ③受け渡し期間になったら，申込者は，図書館カウ
ンターで書籍を受け取る。

書籍の受け渡し期間は，会の開催日約2週間前から開催

日前日までとしている。書籍の購入希望者数を予測するの
は難しいが，毎回書店に15冊程度を確保してもらっている。
書店で一度に指定冊数を確保できない場合は，少数でもそ
ろった時点で，郵送により送ってもらうこともある。こ
の集団購入にあたっては，毎回，書店の協力を得ている。

6. 開催案内（広報）

開催案内は，大学ホームページやメールをはじめ，A3
版のポスターを掲示して広報したり，ポスターをA5版に
縮小したチラシを，図書の貸出手続き時等に学生へ配布し
たりしている。また，図書館内の閲覧机にも案内を置いて
いる。顔見知りの学生には個別に声をかけることもある。

書店から届いた書籍のうちの1冊は，サンプルとしてカ
ウンターに置き，事前に学生が直接手にとって見られる
ようにしている。

IV. 会の実際

開催当日は開催時間の少し前に会場へ行き，イスを並
べたり，ホワイトボードに開催案内のポスターを掲示し
たり，簡単な会場設定を行っている。飲み物やお菓子な
ども持参する。

これまでに開催した第1回から第7回の対象書籍と参加
人数は表1のとおりである。

この会は，特に司会などの進行役を設けず，自由に発
言する形式で進めている。会が始まってからは対象書籍
の内容はもちろんのこと，徐々に関係のない内容にまで
発展し，脱線し，大いに盛り上がり，毎回あっという間
に時間が過ぎていく。

ある回の終了後，うれしいことがあった。参加した異
なる学年の学生同士がその場に残って話しを続けていた
のだ。私も参加した学生と本の話や休日の過ごし方など，
ゆっくりといろいろな話をすることができた。短い時間
ではあるが，このような交流が今後の会でも続くことが

期待できると感じた。

図書館長を含め、毎回参加してくれる教員もいる中、学生の参加者数は半数に満たないのが常であったが、最近開催した第7回（2010年10月22日）は、参加者の半数以上が学生であった。会の終了後に、学生から「おもしろかった。次も参加したい。」との感想があった。

V. 開催後

開催後は、記録写真や、会の中で参加者から出た意見や感想を本学ホームページの「キャンパス日記」というページに公開し、学内へ報告をかねて会の様子をメールで送っている。また、開催の様子をA3版のポスター形式にして、館内に掲示し、次回への参加を呼びかけている。

余談ではあるが、ある回で対象にした書籍の著者が、開催内容を掲載した本学のホームページを見て、本学宛てにメールをくださったことがあった。開催記録の中に「(対象書籍の著者である)先生にぜひ本学の大学祭で講演していただきたい」と記していたのだが、それに対して「ぜひ伺いたい」とのメール内容であった。予想もしなかった出来事に、この会を担当する者として、応援されているような気持ちになった。

VI. 問題点と課題

参加した学生からは「まじめな会だと思っていた」との声をしばしば聞く。やはり「読書会」に対して堅いイメージがあるようだ。そのイメージをどう払拭し、どのようにPRするのがよいか、広報の方法が一番の課題である。

次に、開催時間の問題がある。昼休みの場合、午後から授業があると、足が向かないという学生もいる。また、本学では昼休みに複数の英語の課外コースを実施していることもあり、参加する優先順位がそちらに置かれることもある。これについては第6回から開催時間を夕方に変更しており、今後、学生の参加状況によって開催時間の設定を検討する必要がある。

先にあげた広報の方法とも関連するが、教員と連携をはかり、学生へ参加を促してもらうことや、授業と関連付けてこの会に学生が参加するきっかけをつくるのが検討課題である。

VII. おわりに

上述のように課題は多く、この会自体が学生へあまり

浸透していないのが現状である。それでも、まず続けていくことに意味があると思っている。

近い将来、学生は看護職として臨床の場に出たとき、多くの場面で患者と会話する機会を持つ。患者の話を聞くということはもちろん大事であるが、聞くということだけではなく、自分の言葉や表現で、患者と会話し、コミュニケーションを図るということは、看護するうえで大事な要素のひとつではないだろうか。コミュニケーション能力を高めるためにも、学生には看護の専門分野だけでなく、さまざまな分野の本を読んでほしいと思う。そして、学生にとってこの「本を読んで話す会」がこれまで手に取らなかったような本も読んでみるきっかけとなり、さらには彼らの表現力やコミュニケーション能力が育つような場になることを願いながら、今後もこの会を続けていきたい。また、いずれは学生たちが自主的にこの会を運営していくことも期待している。

最後に、本学学長が、この会の中で言った言葉を紹介させていただき、この報告を終わりたい。

「学生時代にできるだけ多くの本を読むことが本当に大事である。本を読むことは、人の一生を共有することになり、いろんな人といろんな話をすることは、自分の心の栄養になる。」

付記

本稿は日本看護図書館協会2010年第41回研究会（2010年8月26日 於：熊本保健科学大学）において、事例発表した「本を読んで話す会－学生の知りたい、おもしろいを育てる」の内容を加筆・修正したものです。

参考文献

- 1) 読書週間世論調査 本離れ変わらず「教養深めたい」でも「時間ない」特集. 読売新聞, 東京朝刊, 2010年10月24日, 朝特A面.
- 2) 馬橋憲男. 大学での読書運動という試み. 大学時報, 2010;330:46-51.
- 3) フェリス女学院大学附属図書館. いま、図書館に求められるもの フェリス女学院大学の挑戦1－読書を通して学びを見つける. ひつじ書房, 2009.

注

- *1 読売新聞社の実施する全国世論調査で、1980年代から読書に関する調査が実施されている。
- *2 本学では2006年から、「学長が新入生にすすめる100冊の本」と題し、学長が選んだ100冊の図書リストを毎年入学式で新入生や保護者へ配布している。リストは本学ホームページ (<http://www.jrckicn.ac.jp>) でも公開している。